



## ご家族や友人とのクリスマスの集いに「家庭クリスマス礼拝」のひとときを！

クリスマスといえば、毎年、ご家族や友人たちと、あるいは一人で、それぞれ楽しんでおられることと思います。でも中には、「クリスマスって、本当は何？」と思う方もおられるのではないのでしょうか。クリスマス（Christmas）とは、キリスト（Christ）礼拝（mas）という意味です。愛宕町教会では、私たちの救い主イエス・キリストのお誕生を喜び感謝する礼拝を、多くの方々と一緒にお捧げしたいと願っています。表面に礼拝の予定を記してありますので、どうぞお気兼ねなく教会へお出かけください。

けれども、教会に出かけるのは…と戸惑われるかもしれません。そこで、ご家族や友人とクリスマスの集いをなさる際にお使いいただけるように、「家庭クリスマス礼拝」のしおりを作りました。このプログラムは15分程度のもので、ろうそくの灯火の中で静かなひとときを持ち、クリスマスの本当の意味へと思いを馳せていただければと思います。

## プログラム

司会者 家庭礼拝を始めます。（用意があればろうそくに火をつけ、電灯を消します）

讃美歌 108番 いざ歌え、いざ祝え（みんなで歌いましょう。裏面参照、QPコードから聖歌隊による賛美が聴けます）

聖書 ルカによる福音書 第2章1～7節（司会者が読みます）

<sup>1</sup>そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。<sup>2</sup>これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。<sup>3</sup>人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。<sup>4</sup>ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。<sup>5</sup>身ごもっていた、いなすけの MARIA と一緒に登録するためである。<sup>6</sup>ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、<sup>7</sup>初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

説教（どなたか、ゆっくり読んでください）

そのころ、ローマ皇帝アウグストゥスは、帝国内に住んでいるすべての人々の数をかぞえ、そして、名前を登録するようとの命令をくだしました。名簿を作ると、皇帝のために税金を集める人たちの仕事が楽になるのです。人々はそれぞれ、自分たちの家族の本籍地である町へ行って、そこで名前を書き取ってもらわなければならなくなりました。たくさんの人々が、そのために、苦勞しながら旅をしました。おまけに、どの町も人があふれて、泊まる宿を見つけるのはとてもむずかしくなりました。

そのようなわけで、ナザレに住んでいたヨセフも、MARIA と共に名前を書き取ってもらうために、本籍地であるベツレヘムへ出かけました。さて、

ベツレヘムに着くと、間もなく、MARIA に子どもが生まれそうな気配になりました。MARIA は臨月だったのです。ヨセフは、どこかに泊まれる宿はないかと、その辺りを聞いて廻りました。けれども、どの宿屋も人々でいっぱいでした。そのため、とうとう、ふたりは家畜小屋で我慢しなければなりません。その家畜小屋で、子どもは生まれました。MARIA とヨセフは、その子をありあわせのぼろ布でくるんで、飼葉桶の中に寝かせました。いつもは、家畜がその飼葉桶から餌を食べるのでした。

これが、世界の救い主となられたキリストのお生まれになった時のありさまで。主イエス・キリストは旅をしている途中にお生まれになりました。ここには深いわけがあります。これは、救い主が、人間の貧しい中に、惨めな中に人となられた、ということだけを表しているのではありません。そうではなくてこれは、救い主がどんな時代にも、旅を続ける人間のもとにおいでになる、ということをお教えています。

わたしたちの人生は、いつでも旅をしているようなところがあります。決まった家に住んでいるかどうかに関わりなく、わたしたちの人生は、いつも旅を続ける者の人生です。ですから、わたしたちは道連れを欲しがります。一緒に歩いてくれるパートナーや仲間、友人を求めます。一緒に歩いてくれる人が必要なのです。でも、最後の道、死の陰をたどる道だけは、どなたであっても完全に独りで歩かなくてはなりません。そのところでは、どんなに愛し、どんなに頼りにしてきた旅の仲間とも別れて、一人きりで進まなくてはなりません。またそこでは、今まで頼りにしてきたものとも別れなくてはなりません。

そして今、聖書はそういうわたしたちに教えてくれます。そのようにいつも旅を続けるわたしたちのもとに、永遠の神がやって来てくださった。そして、神ご自身がわたしたちと同じような人間となって、「あなたがたと一緒に歩む道連れとなってあげよう。いつまでも一緒に歩む道連れとなってあげよう」と言ってくださった—そういうことを、聖書は教えています。

もうどんな時も、決して独りぼっちではありません。主イエス・キリストがいつも一緒にいてくださいます。だから、クリスマスは嬉しいし喜ばしいのです。クリスマスには、そういう意味もあるのだということを、この時、一緒におぼえたいのです。

お祈り（司会者がゆっくり読んでください）

神さま、感謝です。あなたのお姿はわたしたちの肉眼には見えません。それでも、いつもわたしたちを見守り、共にいようとしてくださることに感謝いたします。

わたしたちは、愛する者と共に歩み、仲間と共にこの人生を歩みたいと願いますが、いつも孤独になってしまいます。けれども、あなたが共にいてくださるために、「御子イエス・キリスト」となって、わたしたちの間に来てくださいました。あなたが共に歩んでくださることが、本当に希望です。どうかわたしたちが、共に歩んでくださるあなたを信じ、自らを大切に生きていく者とならせてください。感謝して、主の御名によって祈ります。アーメン

讃美歌 114番 あめなる神には

黙禱（各自、しばらく心の中で祈ってください）

最後に 「クリスマスおめでとうございます！」（全員で）これでプログラムは終わりです。